おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和５(2023)年
９月号
通巻 637 号
毎月23日発行
（題字　矢追日聖）

★発行日　令和５年９月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町１の12
☎(0742)45－1192
★印　刷　大倭印刷㈱
★定　価　１部　３００円
年間購読料3,500円（送料共）
★郵便振替　01050－6－67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

秋の暮、広島県大崎上島にて　　中本好子さん撮影（文・４頁）

再録　平成2(1990)年3月号『おおやまと』より

日本のお役目について～外から日本を考える～（上）

日本山・寺沢潤世上人との対談　　法主　矢追日聖（満78歳）

今月号は平成2年1月8日、大倭大本宮拝殿において、法主様と日本山妙法寺の僧、寺沢潤世上人が対談されたものを編集しました。

寺沢上人は現在、イギリスの日本山妙法寺のロンドン道場を拠点に活動されており、20年近くの間、日本を離れて平和運動をされておられます。激動する世界の中で、これからの日本の役割を考える時、改めて聖徳太子がなさったお仕事などに非常に心惹かれるものを感じ、日本にもどって聖徳太子の研究をなさっておられるとのことです。

野草社の石垣雅設さんと知り合われて法主様のことを聞かれ、是非法主様にお会いしたいとのことで、この日の対談となった次第です。

この対談は予定より1時間半近くも遅れて始まったのではありますが、法主様が拝殿に入られて30秒もしないうちに寺沢上人も現れるという、グッドタイミングのエピソードから始まりました。

（編集部）

※約33年ぶりの再録にあたって、小見出しを増やしたりなど少し整理をしています。

それぞれのお役目のあり方

法主　あなたはロンドンの方におられるんですな。

寺沢　ええ、6年ばかりロンドンで、それまで長い間インドにおりました。その後ずっとヨーロッパで、修行といいます

かね、私共はただ南無妙法蓮華経というお祈りだけをして、ウロウロと動きまわっておるだけなんです。やはり心は、大変あぶない時代にある中で、ただ祈りの力を通して皆の心を一つに融和していくために、今の時代を清めております。

そんな中で、ヨーロッパで色んな方に会ったり自分も色々と体験する内に、やはり日本の国がこれからやらねばならないお役目というんですか、そういったものをずうっと見通しておられた方として聖徳太子のお仕事が、今も生き続けていると思われるわけです。

私共は日本の倭国の導師として聖徳太子をあおいで、太子が本当に命にかけ日本の国のために植えつけられた何か大きな仕組みといいますかね、これからそれが花開いていかなくちゃいけない重大な使命があって、それをずうっと見ておられるんじゃないかと、そういうことを強く感じまして、日本に帰れば太子にご縁のある場所を出来るだけ巡っては、お導きを頂こうと思って、こちらへも伺ったわけです。

法主　いやあ、私はあまり分かりませんけどもね。私には私に与えられたお役目というのがございますし、これはまあ精神的な面ですけれども、平和社会を生み出すような一つの、底を洗うようなことをしなければならん立場です。宗教人の仕事というよりも、私は俗の俗でいってます。

まあ私自身は自分を一種の分裂症やと思ってますが、自分の肉体の中に二人の人間が入っておるんですね。今年の誕生日で満79歳になるんですけれども、この79年間に得てきた意識と、それから生まれる以前の意識と二つを持ってきてるんです。片方は古いし、もう一方は新しいんでね。この双方のトラブルがしょっちゅうあるんです。

結論からいきますと、あなた方も理解されると思いますけれども、霊界には霊界の社会がありまして、霊界人は肉体のない霊界の方が主体で、肉体のある我々は影になると言うてくるんですよ。

だから霊界が乱れては我々の世界も平和にならないということですね。日本の歴史を眺めても、やはりあの源平時代が一番罪を作っています。あなた方の仏教で言う修羅道ですね。

その後も戦国時代とか色々あって、霊界で苦しんでおる人がたくさんあるわけです。そういう霊界人と現界の我々人間が、心の状態で交流することによって、向こうが浄化されていくということになる、と、私に入っておる霊魂がそういうふうに導いてくれるんです。

霊界人と我々が心と心の交流をすることによって、相手がだんだんと浄化していく。これが救いということになるんですけどね。

あなたもご存知と思いますが、霊魂というものは通達無碍ですから、私の場合は私の肉体があちこち出て行かなくても、ここにいるだけで霊界人と交流できるんです。これはまあ私の持論ですけどね、理屈やなしに私は感じることで分かるんです。

この心と心の交流によって、霊界人が浄化し救われることによって、我々現界にも救いが出てくる。これが皆さん方のおっしゃる回向供養の問題でもあるんです。

まあ、そういうようなことで、私のお役目というのはその内の一つの部分ですけどね。

まず仲良く暮らしていける心を作る

法主　大きく世界がどうの日本がどうのということやなしに、自分の使命ということで、昭和20年の8月15日の終戦の日が出発になったわけです。

その時、私の仕事が今から始まると言われましてね。まず、生きている人間が仲良く暮らしていける心の状態を皆に作ってもらわないけないというところから、一つの生活協同体を始めたんです。これが大倭紫陽花邑の出発です。

終戦後の焼け野原になった大阪なんかで街頭に立って何かしゃべってますと、その日行くとこない、誰も頼る人がないというような者が私の所へ寄ってきます。ああ、こんなん連れて帰ったら、またノドしめやなあ、ご飯食べさせなあかんとじっと考えると、「連れて帰れ」という声が聞こえてくる。「来る者は拒むな」というのが聞こえてくるしね、この山の中に連れて帰って来る。多い時にはそんな人が60人位おりましてね。

それが一つの世帯でおったんです、一つの経済でね。その時初めてね、ほんまに滝に打たれる行の方が楽やなあと思いました。水の中なら出れば温もるんやからいいけれども、経済的に逼迫してくると精神的にも逼迫してくる。目が明いても塞いでも苦痛が出てくるんです。こういうのを無間地獄と言うねんなあと思てね。

まあこういう流れも、3年3年で自然に変わってきましたけれど。

寺沢さんなんかも、出家して仕事されるというのには何かやっぱり自分の意志だけやないものを感じて、やってはると私は思うんやけど。

寺沢　やはり、私のは不思議な出会いですね。出会いから開かれていく道を、色々と考えずにそのまま受け入れていくというだけの話ですけど。

法主　戦前なんか天皇陛下が宮城から出て来られる時に、日本山のお坊さん達が大きな太鼓を提げてね、皆整列している前に出でドンドンとやると、皇宮警察がひっつかまえて引きずっていく。

お坊さん達は、そら違うんや、陛下の道中の安全祈願しているんや言うてね。日本山の出家さん

は信念を持ってはるわ。

上海なんかでも色んな事件ありましたしね。（※昭和７年、反日運動による日本山の僧侶襲撃事件）

日本山も日蓮宗の系統ですわね。同じ仏教でもやっぱり私は日蓮聖人が一番好きです。よく親鸞と対照されますけれど、自分で感じとったところから見ると、他力本願というのはあまり気持がピッタリ来ないんです。日蓮聖人のような自力本願がいいですね。まあ霊界の人でもそうですよ。

そら日蓮聖人も南無妙法蓮華経と唱えよとかね、説教されておるけれどもね。しかし、霊界を見とったら、死ぬまで南無妙法蓮華経と唱えとったかて、地獄へ行っている人たくさんあるから、日蓮が教えたのはそんなんと違うと、いつもそれを思うんです。

日蓮が最後に波木井（はきい）の殿さん（※波木井実長、日蓮に帰依して身延山に招き久遠寺を建てた）に書かれた最後の文章が、日蓮聖人の心やと思うんです。

日蓮聖人の一生のいき方というものを見た時、私ら足もとにも及びませんが、ある程度通じるような体験をさせてもろうてます。

経済的に苦労させられるのは、昔から言う剣の難と同じやと、霊界人は言うんです。終戦から10年間は本当にいい経験をさせてもらいました。

宗教団体の我（が）について

私が今、霊界・現界を通じた一つの平和運動をやっておるんですけれども、その源流はやっぱり神武天皇と長曽根彦の関係から来てますね。

言うたって分かるか分からんか知らんけれども、ここが長曽根の本拠です。昔、九州の一団がこへ移って来て一つのトラブルを起こして、それで長曽根彦が引退してますねん。その後はずっと今の皇族が続いておるわけですけれども、その一番源流のところでイザコザの罪があるんですね。

そういう根本のところを洗っていくようなお役目が私にはあるんです。大げさな、偉そうなことを言うのも恥ずかしいんですけれども、これをやらされるんですよ、私は。

しかし、こういう霊界の浄化ということは、私一人やなくしてみんながやらなきゃならない問題なんです……。

現在の霊界を見てますと、六分どこ平和に動くような気の動きをしてます。けれども人間の世界で七～八分平和になってくるようになったらありがたいんです。裏の霊の世界で争いがあると、その因縁を持って生まれてきておる人がおりますから、そんな人達が争いを起こしてくるんですね。

だから、こういうようなことは悠久な仕事になるんですけれど、誰かがお互いにやっていけばいいんです。それは仏教の形でもキリスト教の形であっても、私は何でもいいと思います。

ただ、一つの宗教団体に固まってくると、どうしても団体の我（が）というものが出てきます。そうするとお互いに争ってしまう心が出てくるので、そういうことのない宗教団体になってほしいんですね。

寺沢　そうですね。そこは本当に陥りやすい弊害ですね。

法主　お上人さんなんか、英国あたりまで行って活動されて、宗教の世界を広く見ておられるから、私の言うことも理解して頂けると思いますけれどもね。

寺沢　私は19歳で出家したんですが、何も勉強しないで、今だに正式な勉強はしておりません。

法主　いや、そんな勉強はいりませんで。衣一つ（ころも）着て自分一人でずうっと歩いているだけでもね、自分の中に何かが湧いてくるもんですよ。

聖徳太子と日蓮と

寺沢　私はまた11日からモスクワへ行くんですが、その前にと思いまして磯長（しなが）の聖徳太子のお墓（※大阪府南河内郡太子町、叡福寺にある）にお参りしてきたところなんです。

日本に仏教が伝わる前の日本の民族があって、当然その頃の人達は、先生がおっしゃるように、現象界や霊の世界というものを平等に見ておられたと思うんです。

法主　そうですね。

寺沢　古代の人達は魂の世界も、現（うつつ）の世界も一緒に生きていたと思うんですね。そういう生活感覚の中で、霊ともあたかも一緒に物を食べたり、話をしたりしておったんじゃないかと思うんです。

そういう古来の日本のきれいな魂の恵みといいますか、そういうものをはっきり持って、その上に仏教を取り入れていった人としては私は是非、聖徳太子と日蓮大聖人をあげたいと思うんです。

お二人の中には、仏教者であっても、インドや中国を通じた仏教であっても、日本古来の民族の考え方、日本の国土に生きてきた神々、そういったものと一緒に矛盾しないで融和させている、この辺りがなかなかすばらしいと思います。

法主　仏教と日本の神ながらとを、ちょうど夫婦のような関係において取り入れていらっしゃるのが大した人です、聖徳太子も日蓮聖人もね。

けどまあ、あんな立派な聖徳太子が、晩年は気の毒な人でしたね、みじめな方でした。

寺沢　ええ、私も偉い人だと思うし、それは耐え

られないくらい、かわいそうだとも思います。誰もあの方の悩んだ心の内を分かる人はいなかったと思うんですけれどね。

法主　聖徳太子というのは、神さんみたいに偉い人だと一般の人は皆、そう思っています。しかし生きている時の聖徳太子の晩年というのは、何であんなに不幸になるんか。因縁因果の法から考えてみても解せんところですよ。

寺沢　その辺のところはどうなんでしょう？

法主　私もはっきり分かりませんが、あの時代とすれば大陸の文化を取り入れなければならないし、仏教は教えとしては立派ですし……。

それに聖徳太子の背景は蘇我氏一族と帰化人で、太子ご自身も蘇我の血を引いておられる。まあ天皇が初めて殺されるしね（※西暦592年、蘇我馬子が崇峻天皇を殺させた）。

あの時代は、日本の昔からの古流を信仰するような物部の一統と、新しい物を取り入れる蘇我の一統とがまず精神的にイザコザを起こしていますね。日本では前代未聞の葛藤だったと思います。

当時の日本人というのは、山やとか岩やとか、そんなところに神さんがおるんやから、突然金ピカの仏さんもってきて、大きな御堂を建てたりしたら、そりゃあ腰を抜かしたと思います。裏には心の闘争というものがあったと思います。

聖徳太子がそれを取り入れたところに原因があんねんし、太子自身は信仰を篤くされて三宝（※仏・法・僧のこと）に帰依するとおっしゃってる。

そんなふうだから反面に、昔から神さんに関係する人は何で太子が外国のあんな仏を拝むのかと、恨みつらみが渦巻いていた。まあ我々が理解できないようなものがあったんやと思うんですけどね。

それに聖徳太子が亡くなる前に奥さんが亡くなられているんですね。その看護までされていて、明くる日に聖徳太子が死んでるんですよ。どうもあれは、暗殺じゃないかなと。

それでまた太子の亡くなられた後、斑鳩の家で蘇我一族の手で、二人おった子供さんや一族郎党が全部殺されていますからね。生きている間、聖徳太子もかなり苦痛やったと思うんです。

寺沢　自分の一族が滅亡することは、あれだけの方ですから分かっておられたと思います。

（つづく）

文責・編集部

表紙写真について

瀬戸内の離島から

中本好子

台所で夕食の支度をしていると、西のガラス戸越しに急に茜色の光が飛び込んでくる。急いで家の横に小走りで行き、海を飽かずに眺める。

季節はいつの間にか、入り日の最も美しい時に移ろって、刻々と茜色はなお濃くなりながらも周りを染めていく。

その絶景の空間に身を置くと、法主さんに出逢えた大きな喜びと、人生のほろ苦さを織り交ぜたような自分の心象風景と重なりあって吸い込まれていくような気持ちになってしまう。

日々の潮の満ち引きは引力があるから？　月が海水を引っ張っている？　と知っても干満の差が３ｍもあっては不思議は消えないが、前に聴いた法話の中で「すべては回転している」と法主さんは話されている。大自然もまた人も「顕幽一体」の中にあって巡り巡っている。霊界と現界を永い時を経て行き来し、人も回転の中で存在しているのだろうか。今日一日、無事に過ごせたことに感謝しつつ「顕幽不二」と声に出して言っている。

写真は本州よりフェリーで30分の大崎上島より西の方を見て。何十年に一度の絶景のようです。

こだまことだま

▼滋賀県大津市　**樋口寛美**

さて５～７月号の日聖法主さんの憑依霊の物語。低級霊の不動丸を一目で見抜いて、そいつに憑かれた女性から「煙草をふかしながら対談の状態で、機を見て引き出」し、「お前に神通力があるならお前の相手（サニワ）を見よ。そこに出ている尻尾は何だ。正体をお前の口からはっきり言え」。

憑依された女性は「仰向けに倒れ、…略…　数分たってからようやく意識が戻ったのである」。多分、私も訪れたことのある瑞光院の部屋で起きた光景が、はっきり見えるようでした。

この展開の痛快さは宮部みゆきのミステリーのよう。去年の暮より私は宮部みゆきの大ファンになりました。霊的世界から持ち込んだ空気感を持つ主人公が活躍します。「シャーロック・ホームズ」シリーズの作者、イギリスのコナン・ドイルも同じ臭いがする作家です。（一部要約）

▼奈良県橿原市　**浅井克明**

僕は生まれも育ちも北海道函館市、しかも実家の目と鼻の先に五稜郭があって、子供の頃から庭同然の遊び場でした。

８月号の「こもれる魂魄の地を訪ねて（第54回）」にそんな我が故郷の道中が描かれていて、ややびっくり。杉本一家の旅路がありありと目に浮かびます。しかしそれ以上に、奈良から海（津軽海峡）を隔てた遠い北海道の我が郷里と大倭・太加天腹と縁が結ばれるとは、意外も意外。箱館戦争を生き延び最終的に勝者側（新政府軍）の要職に任じられた榎本武揚ではなく、戦死を遂げた敗者側（旧幕府軍）の土方歳三とつながるのが大倭らしい？ような気もいたします。

足あと足おと

人は亡くなったら終わりではないことを確かめる旅

神奈川県川崎市　日下部　洋　介

大倭紫陽花邑との出会いは、加藤彰彦さん、加藤さんの奥さんの晴美さん、加藤さんのご友人の高橋健一さん、大木章広さんと２０２２年の山脈（やまなみ）の会の京都集会に参加したことがきっかけです。会が終わって、大倭紫陽花邑に泊まりました。

あの旅は、とても印象深い体験だったので、その時のことと自分の人生のことを少し書かせていただきます。

自分は10年ほど、いわゆるひきこもり状態だったのですが、22歳の時に父が亡くなりました。父の死をきっかけに死を通して教えてくれたことがあると感じ「変わりたい」と思いました。そのタイミングで、地域の「居場所」とつながりました。加藤彰彦さんと晴美さんとは、そこで出会いました。以来とてもお世話になっています。

その地域の居場所に通いながら仕事をして自立していくことを考えていましたが、なかなかできずに悩んでいました。ある時お世話になっている方が、「いつまでも外の世界を眺めていないで一歩踏み出してほしい」ということを、しっかり言ってくれました。その言葉に背中を押してもらい、働きながら資格を取って訪問介護の仕事をしました。

初めてかかわった方は、ヘルパーを派遣する事業所に利用者として自分を登録して介助を受けるのではなく、自ら事業所を立ち上げて、逆に介助者を雇ってご自宅で生活をしていました。仕事経験が全くなかった。なかったのですが、受け入れてくれました。介助者として働く人たちは自分も含めて色んな事情を抱えた人たちが多く、その空気が不思議と落ち着き家族ではないけれど家族のような雰囲気でした。それこそ「居場所」でもありました。

初めて介助に入ったその方は、よく「自分は動きたくても身体を動かせない。君は動けるのだからやりたいことがあったら、やる前から諦めないでやってみた方がいい」言ってくれました。

また「介助を受ける側、介助をする側と分けるのではなく、お互いのいのちを生かし合う関係がつくりたい」と言っていました。話を聴いているつもりでいても、いつも逆に聴いてもらってばかりでした。

その方は、山脈の会に参加する3週間ほど前に、ご家族と介助者が居る中で、ご自宅で亡くなりました。最後の1週間は毎日会えました。一緒に生きた3年半はかけがえのない時間です。

最後、呼吸が止まっていく中、何度も声をかけて一緒に呼吸をしたら、そのリズムに合わせて呼吸が戻って来ることが何度かありました。意識がない状態と言われていたけれど、ちゃんと声は届いているのだと思いました。その場には来られなかった息子さんやお孫さんとはスマホでビデオ通話をしたので、その声もしっかり届いていたのだと思います。何度も呼吸が戻った後、ふっと息がぬける音がして、すうっと顔の色が薄くなりピンクや薄紫色の毛細血管が浮かび上がりました。

その時「透明になった」と感じました。佐藤初女さんという方が、「野菜を湯がく時に透き通る瞬間がある」と、その瞬間のことを「いのちのうつしかえのとき」と言っています。その言葉が浮かんできて、「人も同じで、亡くなる時に透明（いのちのうつしかえのとき）になるんだ」と思いました。

最後の一呼吸まで生ききった姿に、「看取った」のではなく、人はいつか亡くなるということも含めたいのちのことを教えていただきました。

その方に亡くなる前日、「一番行ってみたいところはどこですか？」と聞いたら「奈良の斑鳩にある法隆寺」と言いました。山脈の会の後、奈良の大倭紫陽花邑に行く予定だったので、無理を言って加藤さんに相談しました。そしたら岸田哲さんに相談して、大変ありがたいことに、法隆寺を案内してくださって行くことができました。

自分はこの旅に出る時に、「人は亡くなったら終わりではないことを確かめる旅」にしようと決めました。

山脈の会のあった京都で、不思議なできごとがありました。

（次号に続く）

ただいま、つなかん

奈良上映会

10／29（日）14：00～15：55
於：奈良公園バスターミナル
一般 1500円、学生 1000円

宮城県気仙沼市唐桑半島、３・11からコロナ禍まで、民宿「つなかん」の物語。

語り：渡辺謙
監督：風間研一
音楽：岡本優子
主催：二名おはなし会自主上映実行委員会
（問合せ 090 - 1889 - 2561 矢部）

「神通力如是（じんずうりきにょぜ）」の真意をさぐる　第二十七回

大倭教の源流にさかのぼって

今回は再び中将姫と義母の狭衣が登場します。奇稲田姫の加護によって狭衣が改心し罪障を消滅させた喜びが生きいきと語られています。

原文

十一月二十一日、午前七時半、於鳥見庄山

「ワラハハ中将姫。

母上オ尋ネ申シマスル、姫ノ心ワカリアリヤナ。姫ノ心オワカリアレバ今日ノ日父モ連レダッテコノ高天原、大倭鵄杜ニ参レヨ。姫心ヨリオン待チ奉ル。母上聞エマシタカエ。母上イカガデゴザリマスカ」

「ワラハハ狭衣。

姫ヨ許シテクリヤレ。ソナタノ心モワカリモセズ、私事ノ為ソナタヲ憎シミ参ラセシ罪。吾ガ性ハ山①神ト変ジ神ハ吾レニ行ヲナサシメ玉フ。姫ヨ御礼申上ゲルゾヨ。母ハ今日ノ日ヨリ父豊成卿ヲ真ノ夫ト思ヒ、亦タソナタヲ真ノ吾子ト思ヒ、今日ノ日ヨリ汝ノ為ニ吾ガ力ノ限リヲ盡ス程ニ、姫ヨ許シテクレヨ。汝ノ妹、真ノ子、小百合姫ハ今トテ一人暮ス身、タヨリナキ身ニ候ヘバ何卒姫ワラハヨリモオ願申シ奉ル。父君モエトクセラレ今日ノ日ヨリ真ノ題目唱ヘラレテ候。姫喜ンデクリヤレ、父君モ妹モトモトモニ」

中将姫

「母上、吾心ワカリ玉ヒシカ、姫コノ上ノ喜ハゴザリマセヌ。誰ニモ申サネド神ニ誓ヒ七日ノ間水③籠トツテ神ニ祈リシハ誰ノ為、母ノ罪障一日モ早クトリタキ為、神ソノ願キキ玉ハセシカ。ア、ウレシヤナ、今日ノ日程姫喜ンダ日ハゴザヰマセヌ。

愛シキ君ハミマカリ玉フテ御佛トナッテ吾ソバニアッテ姫ヒトツモ淋シクハゴザヰマセヌ。片方ニハ愛シキ君、片方ニハ亡キ母守リ下サレ、今日ノ日ヨリ亦タ母上、父上、妹、トモニ楽シク暮ス日ヲ姫ハ一時モ早ウ来ルノヲ楽シミニ致シテヰマス。今ノコノ姫ハ世界立直シノ重キ役目、其ノ仕事ノカゲノ手助、姫コノ上ウレシイ事ハゴザヰマセン。コノ上ハ我日本ノ為、皇孫ノ為一心ニ身ヲ捧ゲ、末法ニ真ノ妙法立テ君ノ為ノ御奉公コノ上ノ果報ハゴザヰマセヌ。母上サラバ亦タ後程ニ、母上オ別レ申シ奉リマス。

大倭日高見国鵄杜ニ鎮リ坐ス奇稲田姫命ニオンモノ申シ奉リマス。私事ノ為オン前汚シマイラセシニオ叱リモ受ケズ姫恐レ入リ奉リマス。亦タ命④君ノ御加護ニヨリ吾母ノ罪障ヌグイトリ玉ヒ姫コノ上ノ喜ハゴザヰマセヌ。コノ上何卒父ノ身上、母ノ身上、妹ノ身上御守リ下サイマセ。厚カマシキ事ナレド御願申シ奉リマス。亦タ愛シキ君ノオン仕事、命様何卒オ助ケオ守リ下サヰマセ、サラバオ暇チョウザヰ仕ル」

仝日、午前十時

倭姫、悪魔怨敵退散ノ神楽。

「豊アシ原ノ中津国、我ガ日本ノ国民ハ、我ガ皇孫ノ為命ナゲ出シ盡スノガ之レ即チ人道。我皇孫ハ日本ノ御父君、国母陛下ハ母君ナルゾ。父母ノ心配致ス事ハ子等ガ寄ッテ其ノ心配ヲ取ノケルノガ之レガ道。恐レ多クモ一天萬乗ノ大君ハ御心イタク悩マセラレ、側近ノモノドモ相談相手致ス人一人モ無シ。皇御祖、哀レミテ御心慰メオラレドモイカヤウニスル事能ハズ、其思、ロニハ申シ上ゲラレヌ」

（以下、次回に続く）

註釈

①性（しょう）　㋑先天的な性質。うまれつき。性状。たち。㋺外的影響・関係の如何によらず、常に同一である本質。　（岩波書店『広辞苑』による）

②吾ガ性ハ山神ト変ジ

狭衣の心が山神となったことを示唆する場面が「神通力如是」の中で2カ所ある。

1カ所は原文の11月14日の倭姫の発言である。

「コノ山ニ棲ム山神、今朝ホド申シキカセシニ、汝等マダ来ルカ。退散イタセ。……」

（『おおやまと』令和4年1月号）

もう1カ所も倭姫が語っている。「山神ニモノ申サン。題目供養シテヤル程ニ、汝モトクトク解脱セヨ」　（『おおやまと』令和4年7月号）

ここで語られている山神とは狭衣の心のことであるように思われる。

③水籠（みずごり）

『広辞苑』では同音で「水垢離」と表記され、「神仏に祈願するため、冷水を浴び身体のけがれを去って清浄にすること」と説明されている。

④命君（みことのきみ）

奇稲田姫命にもの申し奉りますとあることから、命とは奇稲田姫命をさすと思われる。

現代語訳

11月21日、午前7時半　鳥見庄山に於いて

中将姫「私は中将姫です。

お母様お尋ねいたします。私の心はお分かりいただけますか。私の心をお分かりいただけるなら、今日という日にお父様もお連れになってご一緒にこの高天原である、大倭鵄杜にお越し下さい。私は心からお待ちしています。お母様お聞き下さいましたか。お母様如何でございますか」

狭衣「私は狭衣（さごろも）です。

中将姫許して下さい。あなたの心を分かりもしないで、私事の為にあなたを憎んできました罪（ぎょう）により、私の本性は山神と変わり、大祖神（おおみおや）は私に行をさせられました。姫よ、お礼申し上げます。母である私（成川貞）は今日という日からあなたの父である豊成卿（成川栄三郎）を真の夫と思います。又、継子であるあなたを真の我が子と思い、今日よりあなたの為に私の力の限りを尽くしますから、姫よ許して下さい。あなたの妹、私の実の子である小百合姫（成川冨子）は今でも一人で暮らしている身の上、はかない身の上ですから、どうぞ姫、私からもお願いいたします。お父様も納得しておられ今日の日から真の題目を唱えておられます。姫よ喜んで下さい。お父様も妹も共に（納得し、題目を唱えています）」

中将姫「お母様、私の心がお分かりいただけましたか。私はこれ以上の喜びはございません。誰にも話してはいませんが、神に誓い、7日間の水籠をして神に祈りましたのは誰の為でもありません。他ならぬお母様の罪障を一日も早く除き去りたい為でした。神はその願いをお聞き下さったのでしょうか。あぁ、何と嬉しいことでしょう。今日の日程、私が嬉しく思った日はございません。

愛しいお方（聖徳太子）はお亡くなりになり、御仏となって私の側におられるので、私は少しも淋しくはありません。片方には愛しいお方、もう片一方では亡くなった母（実母）がお守り下さっています。そして今日の日からは又、お母様、お父様、妹と共に楽しく暮らす日が少しでも早く来ることを楽しみにしています。今のこの私は世界を立て直す重き役目があり、その仕事の陰の手助けができ、これ以上の嬉しいことはございません。この上は、我が日本の為、（私の霊統である奇稲田姫につながる）子孫達の為、ひたすらこの身を捧げ、末法の世に真の妙法立て、天皇（すめらみこと）の為の御奉公をいたす事はこの上もない果報です。お母様失礼いたします。また後程にお会いいたします。お母様お別れいたします。

大倭日高見国鵄杜（大倭神宮）に鎮まっておられます奇稲田姫様に申し上げます。私事の為に御前を汚しましたのに、お叱りを受けることもなく恐れ多いことでございます。又、姫様の御加護により私の母の罪障をぬぐいとっていただき、私はこの上ない喜びでございます。この上は、なにとぞ父の身の上、妹の身の上をお守り下さいませ。厚かましいことですが、お願いいたします。又、愛しき方（日聖）のお仕事（世の立て直し）を、姫様、どうぞお助け、お守り下さいませ。お別れいたします。失礼いたします」

同日、午前10時

倭姫、悪魔怨敵退散の神楽を奏す。

倭姫「豊かに葦の生えている中央にある国である私達日本の国民は、（奇稲田姫様から連綿と続く皇統の）天皇（すめらみこと）の為に命を投げ出して尽くすのが、すなわち人の道です。私共の天皇は日本の御父上、国母である皇后陛下は母上なのです。父と母の心配されることは、その子等（国民）が集まってそのご心配を取り除くのが、すなわち人の道なのです。恐れ多いことながら、一天万乗の天皇はその御心をとても悩ませておられ、側近の者達の中に相談相手になる者は一人もいません。稲田姫様はこれを哀しまれ、天皇の御心を慰めておられますが、どの様にすることも出来ません。そのお気持ちは口では申し上げられません」（以下、次回に続く）

あじさい日誌

8月9日　長崎原爆の日、午前11時02分、拝殿の大太鼓が打ち鳴らされました。

8月15日　台風7号紀伊半島より直撃するが、午後2時には大倭神宮社務所に於て立教開宣祭を行うことが出来ました。

8月18～20日　交流の家でFIWCキャンパーのOG・OBが子どもと共に「サマー・キッズ・キャンプ」を催しました。

8月20日　猛暑の中、大倭墓地と紫陽花邑の大掃除。大倭安宿苑職員・FIWC・大倭会・邑人ら、大勢の皆さんにより午前中で無事終了しました。

8月23日　大倭大本宮月次祭。

9月4日　訃報　五十日が過ぎるまでは皆に知らせるなという遺志だったとのことで、去る6月28日に野保夫さん（東大阪市）が帰幽されていたことが分かりました。97歳。

間際まで普段と変わらない様子だったのにと、この日娘さんが挨拶に来られました。

ご両親の代から大倭に浅からぬ縁があり、大倭会発足時から中西正和初代会長と共に大倭会の要として会計担当。幸重夫人（平成30年91歳で帰幽）とはいつも一緒に行動されていました。平成10年11月号「寸莎」第37回に登場。

訃報

またこの日、溝口ツヤ子さん（奈良市）が帰幽されたと突然の知らせに皆大変驚きました。72歳。遺影は、還暦のお祝いの時の写真でご本人の希望とのこと。

9月6日　大倭神宮月次祭。この日は妙月かあさんのご命日。

午後6時半から大倭会館において矢追家麻呂教長を祭主として溝口ツヤ子さんの前夜祭が行われました。法名は神倭成賢津耶古比女命。

9月7日　ついで帰幽祭が、午前11時半から行われました。

溝口ツヤ子さんは大倭安宿苑を支援するボランティアグループ「あじさいの箱」の創設メンバーで、手まり教室の講師。平成16年11月号「寸莎」第62回に登場。法主様との縁を結んだ且田容子さんが弔辞。

夫の富士男さんは喪主の挨拶で「医者には余命3カ月と告げられたが5カ月頑張ってくれました。… 最後に言いたいことは何か尋ねると『これまで出会った皆さんに感謝の気持を伝えてほしい』と言っていた」と。

手まり教室は8月の夏休みまで休まず、大倭神宮や東方碑周辺、大倭会館のお掃除も顔を出してくれていたのです。

大倭安宿苑では

9月5日　西奈良中央病院の藤本先生をお迎えして誤嚥予防研修会を実施。厨房、医療、介護現場から20名以上が参加。（菅原園）

8月30日（通所）　魚釣りゲームやパン食い競争、テープ引き取り競争に点数を付けて順位を付けながら運動会をしました。（須加宮寮）

8月11日　大倭墓地にお墓参りに行きました。

8月24日　水害想定で、2階から3階に垂直避難訓練。（長曽根寮）

8月24日（デイ）　提灯を吊り法被を着て、盛大に夏祭り。

8月3・19・25日（特養）　テレビの花火の映像やかき氷作りをして夏の季節を感じました。（茂毛路園）

8月25日　定例懇談会の開催。「散髪したい」との要望には予約済みとお伝えしました。（八重垣園）

8月9日　かき氷。昨年は出来なかったので、皆さん喜んでおられました。

あんない

＊月次祭（大倭神宮）
10月6日(金)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催禊会
10月8日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）
10月15日(日)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大倭大本宮）
10月23日(月)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

大倭会文化講演会

ゴリラに学んだ人間の本質について

日　時　令和5年11月12日(日)
午後2時～4時30分

場　所　大倭拝殿　入場無料　申込み不要

講　師　山　極　壽　一　氏

プロフィール:1952年東京都生まれ。京大理学部卒。屋久島で野生ニホンザル、アフリカ各地で野生ゴリラ研究。第26代京大総長。現在、総合地球環境学研究所所長。『猿声人語』（青土社）・『共感革命ー社交する人類の進化と未来』（河出新書）10月刊行など著書多数。

（注意）来場は公共交通機関で。近鉄学園前南口より奈良交通バスで国際ゴルフ場前下車すぐ。

問合せ：大倭0742―45―1192（杉本）

お知らせ

見てね！

『おおやまと』を度々表紙絵で飾ってくれた大和郡山市「らんまん」の松下広美さんがテレビで紹介されます。
NHKEテレ「no art,no life」10月29日8：55～